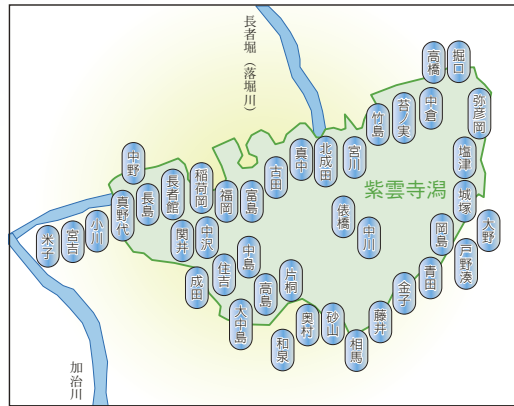


## 紫雲寺潟の干拓と落堀川の開削

『正保越後国絵図』によれば、胎内市（旧中条町）塩津から、新発田市（旧加治川村）向中条あたりまで、塩津潟と呼ばれる大きな潟がありました。絵図によれば、「長サ 壱里半余、横壱里余」（長さ約 5900m、横約 3900m）とあります。塩津潟は加治川をはじめ、菅谷川、舟戸川など大小多数の川が流れ込み、潟はこれら河川の遊水池<sup>\*1</sup>の役目をしていました。

享保 11 年（1726 年）、信州の人で竹前小八郎、権兵衛兄弟が自費での紫雲寺潟<sup>\*2</sup>干拓工事を幕府に願い出ました。工事は許可され享保 13 年（1728 年）に着手。まず長者堀（現在の落堀川）を海に切り落として潟の水を減らしました。その後、潟に流れ込む川をメ切り、潟に水が入らないようにしました。干上がった潟には、泥が厚く堆積してい

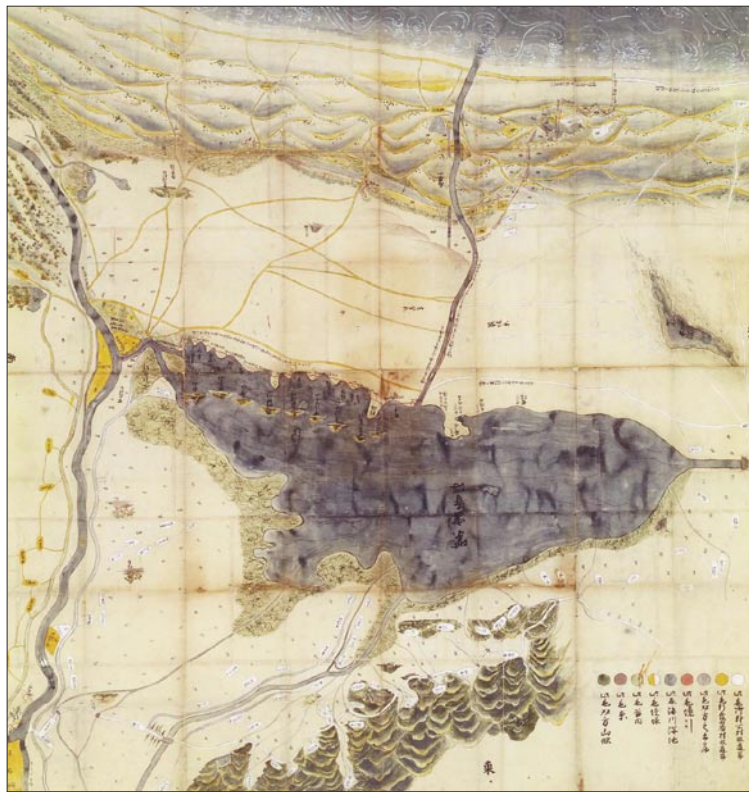
ました。この泥沼のような土地を新田にして 17,000 石余りもの米が穫れるようになりました。そして、紫雲寺潟の跡には 42 の新しい村ができました。



紫雲寺潟干拓後にできた 42 の村々

<sup>\*1</sup> 遊水池 … 洪水時に一時的に水を貯留する人工または天然の池。

<sup>\*2</sup> 紫雲寺潟 … 「塩津潟」は、竹前小八郎、権兵衛兄弟が開発を願い出た頃には、「紫雲寺潟」と名前が変わっていました。



享保六年五月取調紫雲寺潟絵図（竹前茂樹氏蔵）